

腸管ベーチェット病における重症度基準作成

研究分担者 氏名 長沼 誠 所属先 関西医科大学内科学第三講座 役職 教授

研究要旨：ベーチェット病に関する研究班（岳野班）において、特殊型ベーチェットの重症度を作成することが求められている。本研究は久松班と岳野班の主任研究者・分担研究者において、本邦における腸管ベーチェット病に対する重症度を作成することを目的としている。令和3年度は、腹痛、腹部圧痛、血便の臨床症状3項目、CRP、内視鏡所見を合わせた複合的評価に基づいた重症度案を作成した。

共同研究者

長堀正和（東京医科歯科大学）
井上詠（慶應義塾大学）
三上洋平（慶應義塾大学）
馬場重樹（滋賀医科大学）
平井郁仁（福岡大学）
内野基（兵庫医科大学）
福井寿朗（関西医科大学）
谷田諭史（名古屋市立大学）
渡辺憲治（兵庫医科大学）
松岡克善（東邦大学）
桐野洋平（横浜市立大学）
田中良哉（産業医科大学）
松本主之（岩手医科大学）
久松理一（杏林大学）

管活動度に特化した重症度作成の提案が班員からされている。腸管ベーチェット病は眼病変や皮膚病変と独立して活動性が上昇することが多いと考えられる。令和3年度は、腹部症状および関節症状・口腔内病変を中心とした臨床症状に内視鏡所見を加味した重症度作成をおこなう。

原案を作成後、研究班研究分担者、協力者へのアンケート調査を行ない、その後第2回班会議の議論を経て最終案を決定する。令和4年度には作成したスコアの validation を予定する。

（倫理面への配慮）

治療指針作成のプロジェクトであり、臨床試験や研究を施行する内容ではないが、倫理面に十分配慮して、作成を行った。

A. 研究目的

ベーチェット病に関する研究班（岳野班）において、重症度基準を特殊型ベーチェット(BD)において作成することが求められている。本研究は久松班と岳野班のメンバーにおいて、本邦における腸管BDに対する重症度を作成する。

B. 研究方法

令和2年度のベーチェット班班会議においては岳野班長よりベーチェット病の全身状態も反映した重症度を作成する方向の意見がなされている。一方でIBD班班会議では内視鏡活動性や腸

C. 研究結果

本研究協力者と重症度案について協議をおこない、複数の臨床症状と血清学的評価、内視鏡所見を加味した内容で作成をすることとした。令和3年7月に作成した案を、第1回班会議で提示した。重症度をスコアで評価する意見もあったため、研究班研究分担者、研究協力者に対してアンケートを行った。61%がスコアによる重症度の評価・重症度基準の作成、31%がスコアなしによる重症度作成が望ましいことが確認された。一方でスコア作

成はスコアの重みづけの評価方法、妥当性の評価の困難さなどが課題として挙げられ、最終的にスコアによる評価を行わずに重症度の作成をおこなう方針となった。またより多くの意見集約が必要であると考えられ、新規に6名の作成委員、3名の評価委員を加えて、最終案作成をおこなった。腹痛、腹部圧痛、血便の臨床症状3項目、CRP、内視鏡所見を合わせた複合的評価に基づいた重症度案を作成した。

今後再度研究班研究者の意見を取りまとめて、最終案をもとにした重症度と臨床症状との関連を検討する予定である。

特になし

2. 実用新案登録

特になし

3. その他

特になし

D. 考察

研究班のアンケート調査では各項目のスコアによる重症度分類作成が好ましいという意見が61%であったが、より簡便で妥当性を評価しやすい重症度分類を作成する上で、スコア化はせずに最終案を作成した。

E. 結論

腸管ベーチェット病の重症度分類について、腹痛、腹部圧痛、血便の臨床症状3項目、およびCRP、内視鏡所見を合わせた複合的評価に基づいた重症度案最終案を作成した。

F. 健康危険情報

特になし

G. 研究発表

1. 論文発表

本研究に関してはなし

2. 学会発表

本研究に関してはなし

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

1. 特許取得